カナダ南アルバータの仏教会補教士西村与三郎の生涯

―資料編―

藤岡　俊彦

愛荘町歴史研究　第２号　別刷
愛荘町教育委員会　文化振興課
２００９年２月

カナダ南アルバータの仏教会補教士西村与三郎の生涯

―資料編―

藤岡俊彦

はじめに

滋賀は広島、熊本、沖縄などのような「移民県」とはいえない[1]。しかし例外的にカナダ(旧英領)に渡航した人だけは多く、県別に見て全国一である[2]。なかでも彦根市八坂が「あめりか村」[3]（実はカナダ村)と呼ばれ、カナダ移民の母村だったことは比較的よく知られている。そのため八坂についてはかつて二度ほどまとまった研究成果が発表された[4]。ただし八坂以外の移民村について見るとき開出今には不朽の名作『開出今物語』と滋賀県立大学の聞き取り調査[5]があり、他には『多賀町史』[6]と、『米原町史』[7]が移民史にある程度のページを割いている程度でほぼ手付かずの状態にある。八坂の隣村ではじめてカナダに渡ったとされる堀善次郎の出身地大藪[8]（八坂北隣の集落)をはじめ、カナダ移民の母村として研究調査されなければならない集落は多数存在する。

殊に寺院住職である筆者の目から見てカナダの仏教会史上に多大な足跡を残したといえる大藪（前述)、東近江市の旧能登川町域[9]、旧愛知郡稲枝町（現彦根市)[10]の諸集落出身者の足跡についての研究は皆無である。

明治から戦前期にかけての移民史研究において宗教史はさけて通れない課題の一つである[11]。カナダ日系人移民史においても同様であるが、この地の場合、滋賀県出身の浄土真宗信者、いわゆる「近江門徒」が各仏教会で中心的役割を果たしてきたことに大きな特色がある。

一九〇四年の秋、ブリティッシュ・コロンビア（BC）州バンクーバーに住む仏教信徒が集まり仏教会設立を呼びかけ、西本願寺本山に派遣を要請した。このときの発起人として一四人が名を連ねたが、そのうち以下の六人が近江門徒だった。

林半右衛門(大藪・現彦根市)、森野栄治(金沢・現彦根市)、山田捨弥（八坂・現彦根市)、磯野鉄太郎（磯・現米原市)、浜川三弥（磯・現米原市)、堀部弥市（磯・現米原町)[12]

沖縄県他ごくわずかな例外をのぞき[13]、一般に移民数が多い地域は広島をはじめとする西日本の浄土真宗地帯とされる[14]。他地域では少数派だった近江門徒がカナダ各地で遺した偉業は現代の滋賀県人により深く知られてもよい[15]。

本稿でその人生の一端を明らかにしようとする西村与三郎（一八九二～一九五九）は神崎郡神郷（現東近江市）に生まれ愛知郡川原（愛荘町）に転籍した後、沖縄県出身者が多く住んだカナダの南アルバータ（Alberta's south)[16]に渡航した。後に

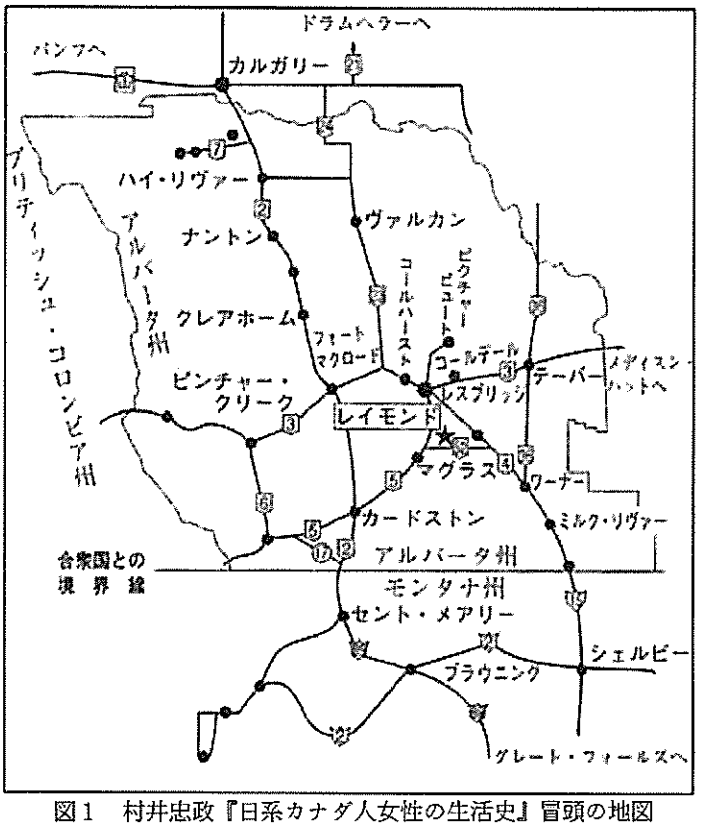

図1　村井忠政『日系カナダ人女性の生活史』冒頭の地図を一部改変した。

この地域で開教使の代理や補佐を役割とする補教士（lay minister）を務めた人物である。この地域には戦前ブリティッシュ・コロンビア（BC）州以外で唯一仏教会（お寺）があった。与三郎が所属したレイモンド（Raymond）仏教会である。仏教会員間の軋轢により河村勇哲開教使（現米原市磯出身）がその職を辞し帰国の途についた[17]。専門的な聖職者を失った会員たちがその名代として選んだのが愛荘町出身者、西村与三郎だったのである[18]。このことから彼の人格や宗教性の高さが知られる。しかし、意外にも彼の足跡は今まで取り上げられたことはなかった。

そこで、若干史料不足の感は否めないが、手持ちの史料と各種刊行物により彼の足跡を辿ってみることにしたい。手持ちの史料とは、彼の長女ケイ（Kay）・和子・山村さん（以下、和子）が来日した際、行った聞き取り調査と与三郎が生前（一九五七年頃？）、彼の旦那寺だった川原了教寺に贈っていたフォト・アルバムである。その他に了教寺所蔵の記録類、親戚の方から伺った話などである。

また刊行物のうち、与三郎が約二〇年をすごしたレイモンド時代については、特に"Raymond Remembered"[19]を依拠した。この書はレイモンドの町民が自らの編纂委員となって資料を収集し執筆した自治体史である。これをその内容から以後「町史」と記すことにする。中身もそう呼ぶにふさわしく、住民の生活に密着した親しみの持てる内容となっている。筆者は、カナダ国内でも入手困難なこの書を与三郎の孫の一人、フランシス・タテベ（Francis Tatebe）博士より頂戴した。

上記史料のうちフォト・アルバムの写真とキャプションを紹介するとそれだけでかなりの紙数になることから今回は概要のみを示すにとどめた。これについては別に発表する予定である[20]。

尚、資料間に内容的に矛盾する点が見られるが、妥当と思われるものを採り、年表を作成し巻末に付した。

フランシスの父方の親類は今も彦根市金沢町に居住している。聞き取りを行った和子の夫、山村光雄の父は彦根市本庄の出身である。日本に住む者の想像をはるかに絶する広大なカナダの地でも彼らは近江門徒であり続けた。

以下、直接には西村与三郎という一個人の生涯を辿るが、この報告により、多くの「海を渡った近江門徒」たちが遺した足

跡に読者の眼が向けられることを念願する。

長女和子からの聞き取り

語り手：ケイ・和子・山村（西村与三郎氏長女）
聞き手：藤岡俊彦
日時：二〇〇四年九月二七日　午後一三時～同一七時
インタビューの場所：滋賀県愛知郡愛知川町（現愛荘町）
　　川原八一〇　浄土真宗本願寺派了教寺

インタビューの目的

このインタビューは、親族に会うため来日した和子に筆者が依頼して実現した。西村与三郎とその家族の生活史を中心に聞き取りを行った。あくまで和子個人の目から見た家族の生活史であるが、戦前からアルバータ州に住んでいた人の生の声を聞けた点で日系カナダ人史全般から見て貴重な内容である。以下は一般的な日系カナダ人史ならびにカナダ仏教会史の知識を前提として筆者が聞き取りの内容をまとめ[21]項目に分け箇条書きにしたものである。

Ⅰ．与三郎氏がカナダに渡るまで

a．一八八九年に神郷（現能登川町）に生まれる。旧姓北村。六人兄弟姉妹の末子。後に愛知郡川原（現愛荘町）に転籍し、西村姓となる。

b．仕事に恵まれず困っていた。八坂の澤田[22]さんからアルバータ州コールハースト（Coalhurst）での炭鉱夫の仕事を斡旋され、一九二三年、カナダに渡ることになった。

Ⅱ．与三郎の結婚から和子に物心がつくまで

a．一九二六年、一時帰国。結婚する。まき（一九〇七年三月一〇日神郷生まれ）を伴いコールハーストに戻る。

b．一九二七年、第一子イサム誕生するが数日後死亡。墓がレスブリッヂ（Lethbridge）に現存する。

c．一九二八年四月一日、ダニー（Danny）・正が誕生。

d．和子の記憶が曖昧だが、結婚の前後数年の間に炭坑が爆発（explosion）し炭坑夫の仕事がなくなる。

e．一九二九年一二月一八日、ケイ（Kay）・和子が誕生する。和子は自分の誕生地をレイモンドではなく、「レイモンドの近く」という。

f．レイモンドにある白人経営の大農場でコックその他の仕事に就くようになる（時期不明）。

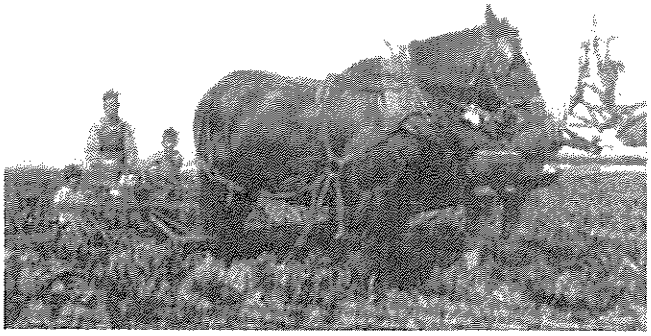

写真１　Meeks家の農場で働く与三郎。次男正、長女和子とともに。町史一三五頁から転載。キャプションによれば一九三三年に撮影された写真で、砂糖大根畑の耕うん作業を行っているところだという。レイモンドに来た当初、コックだった与三郎はまもなく農場労働者に転じた（町史の項を参照）。

Ⅲ. 和子自身の記憶によるレイモンド時代

i. 主に農業に関すること

a. 和子にものごころがついた頃、農場主から土地を借り、イモ類、砂糖ダイコン（sugar beet）、麦などを耕作。他に自分の家族がたべる野菜を作る畑、趣味の花畑にする土地も借りた。

b. 灌漑設備（irrigation system）について。アルバータ州は降水量が極端に少ないので、初期の農家は苦労が絶えなかった。和子も人力で水を撒いたという[23]。

c. 機械化されていない頃の農業はたいへんだった。ことに砂糖ダイコンの間引き作業と収穫作業は幼い和子にとってたいへんな労働であった[24]。ある年は大雪で収穫作業が遅れた。クリスマスも正月も返上し収穫作業を行った。

ii. 戦時期、殊に移動者（evacuee）と日本人差別

a. 白人と普通に付き合っていた。白人は東ヨーロッパからの移民ばかりだった。ハンガリー、チェコなどからの農業移民が寄り集まっていた。彼らはとても付き合いやすかったし、学校でも何も差別らしいことはなかった。親しくしていた白人の友達もたくさんいた。

b. 聞き手が、BC州と違いアルバータ州の日系人が差別に苦しまなかったのは、相手が同じ白人とはいえ英国系ではなく、同じ入植者の東欧系だからかと尋ねると、和子は「そうだ」答える。

c. ところが、移動（evacuation）[25]で日系人が大挙して移動してくると事情が変わってしまった。第一、日系人をあんなにたくさん見たことがなかった。日系人が一挙に増えると白人は遠のいていった。仲良くしていた友達も離れていった。それ以後も白人とはあまり親しくしなくなった。

d. 移動者を受け入れる側に立ってどう感じたかと問うた。すると、和子は西村家が受け入れたevacueeの家族との思い出を話した。戦中住んでいたレイモンドの家は小さかった。物置兼宿泊小屋に八坂の○○さん[26]を迎えていた時期がある。○○家は当時、父親、一五歳くらいと一二歳くらいの娘さん二人で、母親は日本にいた。当時一六歳だった和子と年が近い同性の娘さんがいた家族であるにかかわらず、あまり仲良くなかった。結局、○○家とは長く同居しなかった。

e. 戦後妹が亡くなったときですら、とても親しくしていた白人の友達は来なかった。

f. したがって和子個人にとって、evacuationは好ましいことではなかった。

g. しかし、現在は人種間結婚（intermarriage）が当たり前になり差別問題は解消したね、と語り深く沈黙した。

iii. 終戦から結婚まで

a. 戦争が終わり、政府は日系人を日本に帰そうとした。西村家は日本に帰っても当てがないこと、子どもがみなカナダ生まれであることから帰国しなかった。

b. 河村勇哲開教使がカナダに嫌気がさし日本に帰ろうとした日系人を引き留めた。河村はたいへん頻繁に西村家を訪れたという。

c. 一九四八年にコールデールに農場を購入し移転した。大型機械を導入して大規模農場を作り上げる。

d. 聞き手がフォト・アルバムの大規模自動灌漑設備の写真を

見せる。和子はこれより一時代前の灌漑について以下のように語った。まず、共同で上流に大きなダムをつくる。次に自分の畑近くまで溝を掘って水路を作る。さらに自家用のダムを作って貯水しておき、自分の農地に水路網を掘って水を流す。その水をモーターの動力を用いて汲み上げ畑に散水する。送水用の金属製パイプを配置するまでが重くたいへんだった。当時はビニールのパイプがなくすべて鉄製だったの重いパイプを肩に担いで運ぶ。一箇所の水やりが終わったら水門を閉め、次の水路の水門を開け水路に水を通す。パイプとモーターを移動させ、同じ作業を続けた。

iv. 西村家の日常。とくに食生活

a. 与三郎氏は、たくあん作りが上手で、日系人たちによろこばれた。但し漬け物は麦糠でつけた。

b. ゆでた春菊や、長イモのとろろかけご飯も与三郎さんの好物だったが、カナダ生まれの和子は苦手だった。

c. 日本食は、豆腐、おから、こんにゃく、カボチャ、ゴボウ、ダイコン、ニンジンなど。

d. 日本から送ってもらった乾燥小豆と餅米で、ぼた餅を作った。戦争がはじまって餅米も乾燥小豆も入ってこなくなったが、保存していた材料で正月を祝った。ミカンをのせてお鏡さんも作っていた。

e. 上記のうち、ゴボウ、長イモは日本から種?を持ち込み家庭用の畑で作った。食材のうち、カナダにもともとあるもの、日本から持ち込み栽培したもの、日本から加工後に送ってもらったものの判別は充分につかない。

f. 冬至にカボチャを食べたことは記憶している。

v. 西村家の宗教生活

a. 与三郎は花が好きだった。日本にいた頃、生花を習っていた。後にレスブリッジ仏教会会堂落慶法要の折り、三六年ぶりに仏華をたてている[37]。

b. 報恩講のお斎について質問する。報恩講自体を忘れている。お盆、彼岸と区別がつかない。

c. 補教士、篤信者としての西村与三郎と近江門徒については、思い出せないという。帰国してから思い出してemailで知らせてくれるという。

vi. 和子自身のその後

a. 和子は、一九五四年九月に結婚。アルバータを離れたので、それ以後のことはあまりわからない。

b. 殊に一九五九年一〇月、与三郎氏が農作業中の事故(トラクターに挟まれる)で死亡。後に農場を売却。母がカルガリーに転居したので、南アルバータとの関わりが希薄になった。

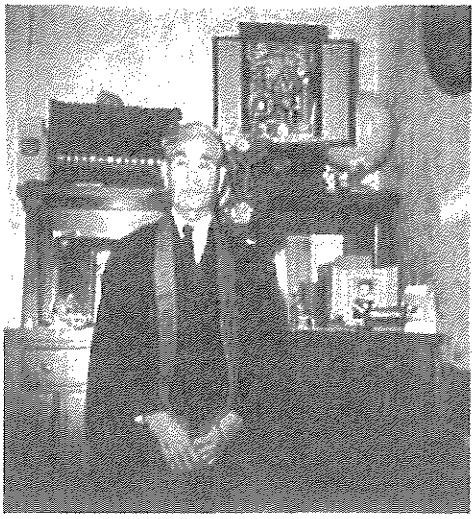

写真2
「一九五五年一月元旦　西村乗水六十三才」
(フォト・アルバム一〇頁キャプション)
自宅お仏壇の前で。

c. 夫、山村光雄さんは戦前日本に向かい、そのまま日本(父の出身地彦根市本庄?)で過ごさざるを得なかった。九年間、日本にいた。多くの人がそうしたように進駐軍で働いていた。カナダに戻ってから職がなくカナダ軍に入隊した[28]。結婚後すぐに、軍の仕事でモントリオール(Montreal)へ。さらにトロント(Toronto)、ドイツ(四年間)へ。帰国後ウィニペッグそして現在も生活しているコーマックス(Comox)で三四年間過ごしている。位置はBC州都ビクトリア(Victoria)のあるバンクーバー島内で、日本人が多く坑夫として働いていたカンバーランド(Cumberland)より少し北東。

d. 挙式後モントリオールに赴く際、与三郎氏からどこに行ってもその地の仏教会に所属するようにいわれる。当時のモントリオール仏教会の補教士は、著名な開教使辻顕隆氏の親戚の方だった。ただし"Bukkyo Tozen"にその名があるタナカ・サタロウ氏とは別の人物である[29]。

e. ドイツから帰国後、ウィニペッグ(Winnipeg)のマニトバ(Manitoba)仏教会に参加していた。聞き手が西村了観開教使が大薮(現彦根市)出身者の二世[30]であると話し、そこが八坂の隣在所であることを地図上で示すと驚いていた。さらに西村開教使が一九七一年二月にレスブリッヂで亡くなったことを伝えると寂しがる。しかし同開教使の奥さんがバンクーバーのシニアハウスにおいでになると伝えると会いたそうなそぶりを見せる。さらにおそらくはJCCA(日系カナダ人文化協会)が運営しているハウスではないかと思う、と自ら推測する。西村開教使夫人に対する深い思いが感じられる。

f. 父の影響もあり、可能な場合、夫の任地の仏教会に参加していたようだが、現在はお寺がない地域で生活している。バンクーバーまで出かけることがたいへんな作業。時間もお金もかかる。与三郎にどこに行ってもお寺にお参りするようにといわれていたが、「なかなか親のいいつけ守れないね」という。

g. 現在、まわりは白人ばかり。夫婦の会話も英語。

vii. 与三郎氏の人柄と家族

a. 西村与三郎には生後すぐ亡くなったイサムを含め五人の息子と四人の娘がいた。(和子の手書きメモによる。但し人名にフォト・アルバムに用いられる漢字をあてている。(例 Tadashi→正)

与三郎　一八八九年神郷生まれ。川原に転籍し西村姓。三一九五九年十月三日死亡。

妻 まき　一九〇七年三月十日、神郷うまれ。一九八九年死亡。

長男　イサム　一九二七生まれ。生後まもなく死亡。

次男Danny・正　一九二八年四月一日生まれ。オンタリオ州オタワ(Ottawa)に在住。

長女Kay・和子　一九二九年十二月十八日生まれ。BC州コーマックス(Comox)在住。

次女操　一九三二年七月九日生まれ。一九八八年四月六日死亡。

三女キミエ　一九三四年一月二九日生まれ。一九七一年十二月一日死亡。

三男Albert　正利　一九三六年三月生まれ。オンタリオ州トロント(Toronto)に在住。

四男Carl 正信　一九四一年六月十日生まれ。エドモント

ン（Edmonton）に在住。
五男Arthur　英世　一九.一九四六年八月十九日生まれ。
カルガリー（Calgary）に在住。
四女Eileen　幸枝　一九五〇年四月十四日生まれ。レッドディアー（Red Deer）に在住

b. 与三郎氏は、厳しい人だった。砂糖ダイコンの作業は辛い立ち仕事だったが、立っている姿勢からして違っていた。だらけた振る舞いはなかった。

c. 小学校に入るまで、冬の間、手製の黒板とチョークで日本の文字を教えられた。今から思うとお父さんは学校の先生になりたかったのではないかと思う。

d. 与三郎氏は英語もかなり話した。二世の和子からすると上手ではなかったが、白人を相手に仏教のこと、哲学のことをよく話していた。

e. 与三郎氏から了教寺へいただいたアルバムには、手書きのキャプションが付してある。漢字の使い方が正確で、書き損じも非常に少ない。高い学歴などあったはずもない。にもかかわらず見事な筆跡でいつも感銘深く拝見していると聞き手がいうと、和子は日本語が読めないと残念がる。

f. 和子自身もかなりの勉強家。筆者が示す諸資料に興味を示す。トロント仏教会の"Bukkyo Tozen"など英語資料は帰国後早急に入手するとのこと。上掲の『日系カナダ人女性の生活史』のなかでも、サリー松代が母から、一生涯勉強を続けるように、といわれている[31]。日系カナダ人は全般に学歴が高く、専門職に就く人が多いとされるが親のしつけによるのだろう。

g. 与三郎氏の教えが子どもたちの現在を作りあげたといえる。ダニーはアルバータ大学物理学科卒業で、原子力が専門。京大、東海村、日本各地の原発に指導のため頻繁に訪れていた。弟の一人、アーサー（Arthur）・英世はカルガリー大学教授で美術を教える。筆者とemailで交流しているカール（Carl）・正信はもと学校教員。文章から頭脳の明晰さと暖かい人間性がにじみ出ている。同じくemailを交わす和子の次の妹、操の娘、フランシス・タテベは、視力検査の関係で博士号を持っている。フランシスの夫は著名なコンピューター技術者。聞き手が和子の男兄弟や姪の話をすると誇らしい様子を見せる。

h. ただし、「男の子たちは学校にも行かせてくれたけど私たち（女性）は駄目だったね」と語る。

Ⅷ. 南アルバータの日系人について

a. 与三郎は、岩浅亨淳氏はキリスト教徒だから自分たちとは違う人、とみなしていたという。聞き手が、安芸門徒の岩浅氏がモルモン教に改宗したのはずっとあとのことだ[32]、と反論したが、和子は岩浅を早い時期からのキリスト教徒だと見ている。

b. 弘中与一の子息ロバートと長男ダニー・正は、同級生で秀才の二人は仲がよかった。弘中がレスブリッヂ大学学長を務めていたという記事（レスブリッヂ本派仏教会のウェブサイト）を見せると懐かしがる。

c. 筆者が、『日系カナダ人女性の生活史　――南アルバータ日系人社会に生まれて――』村井忠政著、明石書店、二〇〇〇年』を見せる。主人公のサリー松代モリヤマの弟、ジョー・タカハシ、シン・タカハシの写真を見て懐かしがる。さ

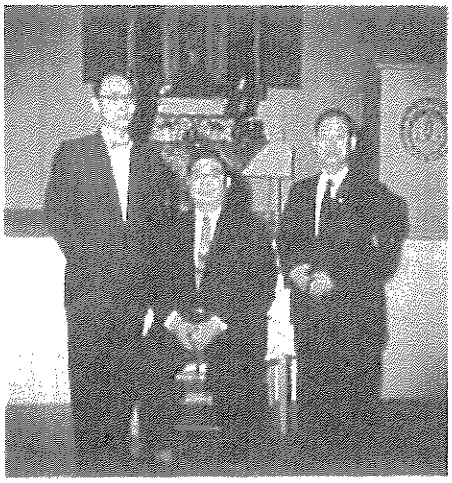

写真3
向って右から河村、辻、猫田の三開教使。河村は米原市磯出身、辻は二世で、父は彦根市新海出身、猫田も二世で父祖の地は広島である。（フォト・アルバム四頁）

らに彼らの末妹マチエの夫故市居弘三氏が旧能登川町長を務めていた時期に同町とテーバー町（冒頭の地図参照）と姉妹都市となったことを話す。和子は詳細までは知らなかったが、姉妹都市提携がなされた[33]ことは知っていた。

d. 河村勇哲、西村了観、辻顕隆など著名な開教使はじめ著名な日系人の出身地や父祖の地を筆者が地図を見せて示した。米原市磯、彦根市大藪、同新海、そして八坂、神郷などがあまりに近く、カナダ移民を送出した湖東の村々の位置関係を示すと驚く。

e. 和子が幼かったころ、レスブリッヂには沖縄県人が集団で住んでいた地域があった。後に子どもを連れて亡くなった長男の墓参りに出かけた与三郎は、その沖縄県人を自分たちとは別の人だといっていた。

ix. 和子が体験したカナダの気候と風土

a. 寒さは年によるが、寒い年は地表から三〇センチくらいまでの土が凍った。しかし、積もった雪がシヌークという暖かい風が吹くと溶けた。その時だけ暖かい。シヌークがやむとまた雪が積もった。

b. オーロラ（Northern lights）が美しかった。現在、子供がYellowknifeで教員をしている。日本人がよくオーロラを見にやってくるという。

c. カナダで生まれ育っていても国土の広大さに驚くことがある。聞き手には想像もできないだろうという。ドイツ駐在中（一九五六年）にスエズ運河の領有権を廻り紛争があった。カナダ軍の他、インド、ブラジルからも軍隊が派遣されていたエジプトから帰国。母の住むカルガリーへ向かう途上、鉄道で二日を要した。景色にほとんど変化がなく平原が続いた。そのとき本当に広いと感じたという。（以上）

聞き取りをおえ、帰国した和子からの便りを待った。ひと月ほどして短い手紙に、Barry Broadfootの“Years of Sorrow, Years of Shame”(1977, Doubleday)が郵送されてきた。それ以後、連絡が取れない。

町史和訳

レイモンド町史は、そこに住んでいる、また住んでいた家族の生活歴について多くの頁数を割いている。与三郎一家についても以下のように詳細な記述があり、次男正の項はまた別にある。それでも、与三郎一家に割かれる紙面は他と比べむしろ小さい。この点、日本の自治体史と大きく異なり興味ぶかい。

以下に示す和訳はさきの聞き取りと内容的に重複するが、そ

れは史料報告という本稿の性質によるものである。なお、町史により新たに得られた情報（聞き取りと矛盾するものも含む）のなかで重要と思われる箇所に傍線を付した。与三郎の渡航前後から数年の記事には聞き取りと矛盾が多い。また彼の仏教会員として活動についてはどちらからも十分な情報を得られない。

西村・フランク・与三郎（北村）とまき

北村・フランク・与三郎は一九二三年、農家の末子が日本で暮らすよりは豊かな生活を求めて滋賀県からカナダにやってきた。彼はカナダの他の地域から転入したのではなく直接、レイモンドにやってきた。最初、ミークス[34]家のところで働き、そこで英語と料理を学び始めた。

一九二五年の終わりに、日本に戻り結婚。まきの家を相続するため西村姓になった。二人は一九二六年、カナダに戻る。与三郎はコールハースト炭鉱のコックになる。一九二九年、同炭鉱事故の後、穀物生産を始めようとレイモンド南西部のブリムホールの農場に移った。しかし、穀物の値段が下がり、灌漑設備のないこの農場での前途に絶望を感じたので、翌年、レイモント西部にあるウォーリー家の砂糖大根（甜菜）農場に移り、労働者として働いた。さらにその翌年、一家は一マイルほど南のミークス家の農場に移った。この農場は小規模ながら（八十エーカーほど）灌漑設備を備えていた。世界恐慌にあえぐ世相のなか、砂糖大根、ジャガイモその他の穀物の生産と大規模な庭園運営により世界恐慌の時期をしのいだ。与三郎は庭仕事を楽しみ、見事な野菜と花を育てた。彼の技術は友人や近所の人々に広く知られた。彼の作った野菜と丹精した花々は品評会で多くの賞を受けた。約一五年、ミークス家からの借地で農業を営んだ後、一九四八年、コールデールの農場を購入した。レイモンドで和子、操、君江、アルバート、カール、アーサーが生まれた。末のアイリーンはコールデールに移ってから誕生した。現在、和子は夫山村光雄とB.C.州のコーマックスに住んでいる。操（一九八八死亡）は、レスブリッヂのハリー・タテベと結婚した。君江はテーバー病院で看護婦として死亡した一九七一年まで働いた。アイリーンは夫ウェイン・マッキーなど家族ともどもレッド・ディアーで農業機器製造の事業を営んでいる。アルバートはアルバータ大学を卒業し理学の学位を取得。現在、トロントにあるゼロックスカナダのカナダ電気センター勤務している[35]。妻キヨミ、子供たちと州テラ・コッタに住んでいる。カールはアルバータ大学卒。教育学の学位を持ち、妻キャロルともどもエドモントンで教師をしている。アーサーは

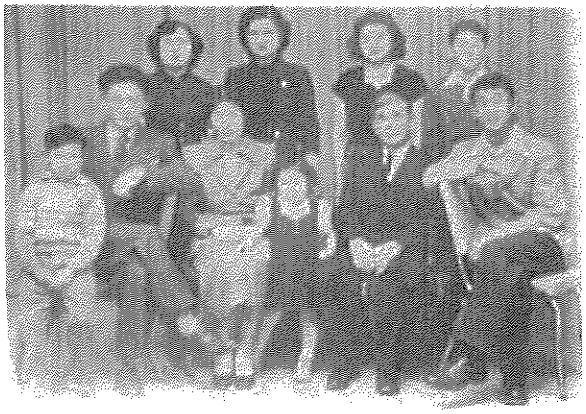

写真4
「一九五二年一月二日撮影　西村与三郎一家
前列向テ右ヨリ　二男正利、父、四女幸枝、母、
長男正、四男英世　後列右ヨリ　三男正信、
三女キミエ、長女和子、次女操」
（フォト・アルバム二頁のキャプション。
与三郎は正を長男としている）

レスブリッヂ大学で教育学の学位を取得、現在、カルガリー大学の美術学部教授。与三郎がレイモンドに来る以前、コールハーストで生まれたダニーはアルバータ大学で理学の学位を取得。その後、東部に移りチョーク・リバー核研究所で原子力を研究。現在は引退して妻ヨウコとオンタリオ州ディープ・リバー在住。

与三郎は、レイモンド仏教会の熱心な会員だった。仏教会役員として貢献したばかりでなく、一九三〇代末から四二年まで補教士を務める。コールデールに移った後もその地の仏教会役員として、そして補教士として活躍した。晩年にはコールデールのロータリークラブ会員にもなった。

フランク（与三郎）は、一九五八、農場を売却し、コールデールの市街地に移った。彼は一九五九に死亡。まきは一九八九年に死亡した。（以上、原文は巻末に付す）

写真５　レイモンド仏教会創立二十周年記念法要に参加する西村与三郎、富江捨次郎両補教士。後方の法衣姿が富江である。彼ははるばるＢＣ州ケローナからやってきた。富江の出身地は東近江市福堂で与三郎の出生地神郷から数キロ湖岸よりという近さである。
（フォト・アルバム一九頁）

川原の親族からの情報

与三郎の死後、彼の日本での土地家屋（川原八二二番地）を譲渡された川原の西村孝司家にはその際の書類が残っているようだ。信頼の置ける資料によると、と前置きして孝司氏が口頭で語ってくれた。与三郎は神崎郡神郷で一八九二年九月十日に生まれた。父は与兵衛、母はみよという。与三郎は三男で、彼の長兄与一郎夫妻は与三郎の転籍時、カリフォルニア州ロサンゼルスに渡航していた。与三郎は一九二三年秋に川原の西村留次郎、きみのもとに養子に入るが、その時期、留次郎も「アメリカ」にいた[36]。一九二五年秋、西村家の養女、まきと結婚する。まきは留次郎夫妻の実子ではないが、夫妻との関係は分からない。ただし、与三郎と結婚する数年前から西村家に入籍していた。

（以上、二〇〇八年九月二八日聞き取り）

フォト・アルバムの概要

フォト・アルバムの写真と与三郎が手書きした詳細なキャプションはことに仏教会員、仏教会補教士としての与三郎を知る際に重要な資料である。本稿では紙数の関係上、掲載できないので概略のみを記す。最初の漢数字は頁数を示す。アルファベットはその頁の写真の向かって右から左に付している。上下は無視した。与三郎の生涯を知るうえで重要と思われるものは太字とし、撮影年月日等の下にキャプションから得られた情報を付した。

一　西村農場家屋前景航空写真　一九五三年春　一九五二年十一月、西村邸に西本願寺門主夫妻が訪問した。
二-a　クリスマスツリーの前で和服姿の幸枝　一九五五年頃
二-b　十人全員の家族写真　一九五三年一月二日
二-c、三-a～cおよび一六　長男正アルバータ大学卒業写真　一九五四年五月十四日
コールデール仏教会堂での演芸会　一九五六年二月十二日
四-a　四男、四女（「四男」は五男英世か）　撮影時不明
四-b　河村勇哲、辻顕隆、猫田円整の三開教使（仏教会名不明）　撮影時不明
四-c　東京あそか病院主事田中もと子コールデール仏教会訪問　一九五二年夏
五　西村農場で北米特派講師深浦正文博士、河村夫人と　一九五五年秋
六および七　まき父五十回忌、小谷田竹次郎夫妻、小坂正造夫妻と共に　一九五六年三月六日
八および九　テレビ受像機の前で、幸枝五歳九ヵ月　一九五六年一月
一〇-a、cおよび一一　和子結婚式、レイモンド仏教会堂挙式後退場の新郎新婦　一九五四年九月十五日
一〇-b　自宅仏壇前で西村乗水六十三歳　一九五五年元旦
一二　レスブリッヂ市マークイスホテルで和子結婚披露宴、ウェディングケーキ入刀　一九五四年九月十五日
一三　レスブリッヂ仏教会堂で南アルバータ日曜学校教師連盟主催大演芸会　一九五五年三月
一四および一五　コールデール仏教会堂内陣前で降誕会兼花祭記念撮影、この後町内病院訪問　一九五五年四月
一七　レスブリッヂ仏教会堂新築落慶法要に献ずる五葉松　一九五六年三月末
一八-a　エドモントンにある州庁舎　撮影時不明
一八-b　「寺参りする西村夫婦」、冬季の路上で高級自家用車の前に立つ夫妻　撮影時不明
一九-a　レイモンド仏教会創立二十周年記念法要お練　一九四九年四月九日　※日付は他の資料による
一九-b　西本願寺門主大谷光照夫妻レイモンド仏教会などにご巡教の記念写真　一九五二年十一月
二〇　西村農場の噴水式灌漑機　撮影時不明
二一-a　砂糖大根満載の自家用トラック　一九四五年秋
二一-b　豆類収穫用のコンバイン・ハーベスター　撮影時不明
二二-a、二三-b、三二-b、三三-a、三三-b、三四-a、三四-b、三七-a　バンフ国立公園の景観　一九五二年八月
二二-b、二三-a、二九-b、三八-a、三八-b、三九-a、三九-b、四〇-a、四〇-b、四一-b　ウォータートン・レーク国立公園絵葉書一　購入時不明
二四、二五、二六、二七、二八　バンフ国立公園内レイク・ルイーズなどの絵葉書　一九五二年八月購入か
二九-a　カルガリー市内の公園にある恐竜の大型模型　一九五二年八月撮影か
三〇-a　R・ロビンソン、生田亨成と与三郎　一九五〇年夏
三〇-b　大谷嬉子夫人に贈られた羽子板を持つ幸枝　一九五六年一月
三一　コールデール仏教会会員宇都宮源二郎氏葬儀　一九五五年二月
三二-a　ボー河の灌漑用バァサノ・ダム堰堤　撮影時不明

三二-c エリザベス女王戴冠記念行列するためデコレーションをこらした英世の三輪車　一九五二年
三五-a 一九四〇年代までの穀物収穫の光景　一九四〇年代
三五-b カナダ自治開始を記念する日のパレード　撮影時不明
三六-a 麦類の刈取をするバインダーを操る与三郎と同乗する正　一九四〇年代
三六-b 砂糖大根積載機を操る与三郎　一九四〇年代
三七-b ストロベラー作業時の正利　撮影時不明
四一-a タカカウ滝絵葉書　購入時不明　（以上）

むすび

本稿は、あくまで史料紹介を目的としたものである。そのためにほぼ同じ内容の記述が繰り返される結果となった。考察を加えず史料そのままを提示することを目指したためである。

戦前から南アルバータに住んでいた人の生活史はあまり語られることはなかった。村井忠政氏の著作の後、N. Rochelle Yamagishi, "Nikkei Journey: Japanese Canadians in Southern Alberta" (2005, Trafford Publishing)が世に出た。基本的に和子への聞き取りとほぼ同じ手法でまとめられているので参考になった。またこの著作を読んで、和子からの聞き取りと町史の内容を日本語で発表する必要を感じることにもなった。

私見によれば、和子からの聞き取りのなかでもっとも資料的価値が高いのは太平洋戦争以前から南アルバータに住んでいた人の目からみた太平洋戦争期であろう。読者は和子からの聞き取りを読んで戦争前まで日系人差別がほとんど見られなかったことにむしろ奇異の目を向けられるかも知らない。だが、カナダの南アルバータに関する限り和子の思い出は特異なものではない。それが移動者の到来によって変化していった過程はもっと注目されてよい。また、西村家の食生活なども他の資料にはみられないものである。反面、聞き取りおよび町史からは南アルバータの仏教会補教士としての西村与三郎についての情報はあまり得られない。だがフォト・アルバムから、現在のところ最新のカナダ仏教会沿革誌ともいうべき "Bukkyo Tozen" に収録されていない情報を得ることもできる。本稿では概要を挙げるにとどまったがこの史料の紹介と分析を現在執筆している。

ただ、現在の目からみて残念に思える面もなくはない。与三郎が沖縄県出身者を自分たちとは違う人たちといていた（和子からの聞き取りⅢ－ⅷ－e）という点である。どこがどう「違う人」だったのだろう。沖縄県人が他の日系人たちからどのように見られていたか、別の機会に論じてみたい。結論を先取りするならば、日系人カナダ移民史には白人に差別され、排斥されてきた被差別の歴史であると同時に、それとはまったく正反対の側面もあったということである。

（浄土真宗本願寺派了教寺住職）

年月日	年齢	西村与三郎にかかわる出来事、事跡
1892.9.10	0	北村与三郎、神崎郡神郷に誕生
1920	28	日本で五葉花を立てる
1923	31	愛知郡川原西村留次郎家に養子入籍
1923	31	カナダに渡り、コールハースト炭鉱で働く
1925秋～暮	33	一時帰国、西村留次郎夫妻の養女まきと結婚
1926	34	まきとコールハーストに戻る
1927	35	長男イサム誕生、まもなく死去
1928.4.1	35	次男ダニー・正誕生
1929	37	コールハースト炭鉱爆発事故、世界恐慌はじまる
1929.12.18	37	長女Kay・和子誕生（出生地「レイモンドの近く」）
1930	38	この頃、レイモンドのMeeks家で働きはじめるか
1931	39	ブリムホール家の農場で働く
1932.7.9	39	次女操誕生
1932	40	ウォーリー家の農場で働く
1933	41	ミークス家の農場を借り、種々の農産物を生産する
1934.1.29	41	三女君江誕生
1936.3	43	三男アルバート・正利誕生
1940.1	47	河村開教使離任に伴いこの頃補教士となる。町史はもう少し早い時期からとする
1940春	47	河村開教使に仏教会の負債が完済できたと手紙を書く
1941.6.10	48	四男カール・正信誕生
1946.8.19	53	五男アーサー・英世誕生
1948	56	コールデールの農場を購入転居。レイモンドを去る
1949.4.9	56	レイモンド仏教会創立二〇周年記念法要に参加
1950.4.14	57	四女アイリーン・幸枝誕生
1950夏	57	R.ロビンソン教授と生田亨成氏を迎える
1952夏	59	コールデール仏教会に大東京あそか病院主事田中モト子が訪問する
1952.8	59	バンフ方面に家族旅行
1952.11.5	60	西本願寺門主夫妻の訪問を受ける
1953.6頃	60	エリザベス二世戴冠祝賀行列の際、英世の出品作が一等を受賞
1953	61	砂糖大根収穫機を三〇二〇ドルで購入
1954.5.14	61	次男正、アルバータ大学理工学部卒業
1954.9.15	62	長女和子、山村光雄と結婚
1955.3	62	レスブリッジ仏教会堂で南アルバータ日校教師連盟主催演芸会に出席
1955.4	62	コールデール仏教会花祭兼降誕会に出席。造花を持って病院に見舞い
1955秋	63	北米教団特派講師、深浦正文博士の訪問を受ける
1956.2.12	63	コールデール仏教婦人会主催の演芸会に出席
1956.3.6	63	コールデール仏教会堂で義父の五十回忌法要を勤める
1956.4.1	63	レスブリッジ仏教会堂に五葉松を献じる
1959.10.3	67	農作業中トラクターにはさまれ死亡

（注）

1、川畑愛作『海を渡った近江の人たち』（一九八六年、滋賀県）三七一～三七二頁に掲載された国際協力事業団刊『海外移住統計』参照。

2、一九二〇年一〇月のカナダ国勢調査では、出身県別に滋賀県三〇五四人、和歌山県二五九七人、広島県一七五八人、熊本県一四一七人、福岡県一三七五人などとなっている。なお、この時点での日系人総数は一二二七三人である。『加奈陀同胞発展史第三』（一九二四年、大陸日報社）五七頁参照。開戦の一九四一年には日系人総数は二二〇九六人となる。カナダ国勢調査一九四一。

3、八坂がいつごろから「あめりか村」という別名を冠したか不明だが、一九二四年にはすでにそう呼ばれている。佐々木敏二「戦前のマスコミに見た移民関係記事を追って」（『汎』二、一九八六年九月、PMC出版）百五十六頁参照。

4、立命館大学人文科学研究所『湖東移民村の研究』（一九六四年）、戸上宗賢編著龍谷大学社会学研究所叢書第七巻『ジャパニーズ・アメリカン―移住から自立への歩み』（一九八六年、ミネルヴァ書房）。ただし両著とも八坂のみを取り上げているわけではない。

5、松宮増雄著発行『開出今物語―梅の花と槭―』（一九八四年）、近江商人研究会「進取と望郷その二―開出今における座談会―」滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』第八号）

6、『多賀町史』下巻（一九九一年、多賀町）。ただし内容に問題は多い。疑問点などは、ブログ『海を渡った近江門徒』「代表的な移民村（5）http://bukkyotozen.blog.eonet.jp/default/2007/10/post-08ba.html」および同「（6）」を参照。

7、『米原町史』通史編第五章（二〇〇二年、米原町）一〇一八～一〇三二頁。この当該頁の著者、佐々木敏二氏の『日本人カナダ移民史』（一九九九年、不二出版）は、滋賀県からカナダに渡航した人々の足跡を客観的な立場で明らかにしている。同氏と共に『カナダ移民史資料』を編纂した権並恒治氏（元ブリティッシュ・コロンビア大学図書館史書）は、愛荘町市に数年間居住した。権並氏は長野東在住の野口周三医師、松下電器中村会長他、一九四二年生の愛知中、彦根東高出身者に知人が多い。

8、堀善次郎については、佐々木敏二『日本人カナダ移民史』七六頁などを参照。その他、大畝出身者には林半右衛門他特記すべき人物が多い。

9、この論文の主人公である神郷出身の西村与三郎、福室出身冨江捨次郎など多数

10、一九一六年本庄出身で愛荘町川原在住の辻野たみ氏は独身時代、旧葉枝見村で小学校教員を務めた。同氏の思い出には帰加二世（カナダから日本人としての教育を受けに帰国した二世）と接した貴重な体験が多い。浄土真宗北米開教総長も務めた故辻顕隆開教使の父亀次郎氏も葉枝見村新海出身である。

11、筒井正『一攫千金の夢―北米移民の歩み』（二〇〇三年、三重大学出版会）、島田法子『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』（二〇〇四年、現代史料出版）などを参照。

12、滋賀教区史編纂委員会『近江に生きる浄土真宗と民衆』（二〇〇四年、浄土真宗本願寺派滋賀教区機関運動編纂委員会）七三頁参照。ただし執筆以後の知見により一部を訂正した。

13、沖縄県人も渡航先で浄土真宗の信者になった。ハワイの事例は、Ruth Tabrah, "A Grateful Past A promising Future -Honpa Hongwanji Misson of Hawaii 100 Year History 1889-1989", (1989, Honapa Hongwanji Mission of Hawaii) 一三二～一三五頁を参照。沖縄県出身者とその子孫の浄土真宗化のプロセスの研究は進んでいない。カナダの南アルバータ地方には多くの同県出身者がいたが、彼らの宗教生活については今後の研究を待たなければならない。

14、有元正雄『宗教社会史の構想』（一九九七年、吉川弘文館）などを参照。

15、無論、滋賀県出身者がすべて仏教徒だったのではない。合同教会の清水小三郎牧師や西村登美さんなどキリスト教徒も多い。

16、村井忠政『日系カナダ人女性の生活史　――南アルバータ日系人社会に生まれて――』（二〇〇〇年、明石書店）二九一頁参照。

17、河村開教使の辞任については、レイモンド仏教会編『レイモンド仏教会史』（一九七〇年、同朋舎）三六頁参照。

18、前掲書には、仏教会各役員名簿があるが補教士の欄はない。また浄土真宗本願寺

派にかかわる書籍のなかで西村与三郎の名が記されている事例は筆者の知る限り河村勇哲『カナダアルバタ・カウボウイソングの里』（一九八九年、同朋舎）の七頁にみられるだけである。ただしこの本には氏名が出るだけで西村与三郎が補教士だったとは記されていない。公刊書籍のなかで彼が補教士だったと記されている事例は、町史（The History Book Committee Town of Raymond, "Raymond Remembered", 1993）の一〇二頁にみられる。

19、注12の英文の書籍。

20、『多文化共生研究年報』（委員長筒井正氏）に投稿予定。なお、カナダ仏教会史に及ぼした近江門徒の影響全般について『近江に生きる浄土真宗と民衆―滋賀教区百二十年史』（二〇〇四年、浄土真宗本願寺派滋賀教区基幹運動推進委員会）六九～七九頁、一五四～一五八頁に記した。参照されたい。

21、村井忠政前掲書はカナダのこの地方で暮らした日系人の生活を丹念に描きこんでいる。

22、『加奈陀日本人農業発展号』（一九三〇年十月、加奈陀日々新聞社）二六四頁に「祝農業発展号之発刊／滋賀県出身／澤田外松／アルバータ州コールハースト郵函二九三」という宣伝記事がみられるからである。なお松枝与四松『加奈陀在留同胞総覧』（一九二〇年、日加新報社）七五頁に「秦川村澤田外松」の名がある。

23、日本語でこの時期の灌漑の様子が綴られているものとしては、河村前掲書一三五頁がある。またこの地域の気候条件の厳しさについては同書三頁を参照。

24、砂糖大根の間引きと収穫作業の大変さについては、ジョイ・コガワ（Joy Kogawa）著"Obasan"、長岡沙里訳の邦題『失われた祖国』二見書房、一九八三年、二四四～二四六頁などを参照。

25、BC州内の日系人は、太平洋戦争開戦後、男女別の収容所に入れられるなど不当な扱いを受けた。彼らが家族で暮らせるという条件で砂糖大根農場労働者としてアルバータ、マニトバ両州に移り住んだことを移動（evacation）といい、やってきた人を移動者（evacuee）という。また、かれらは新来者なのでニューカマー（new comer）とも呼ばれた。

26、この家族は八坂出身ではない。〇〇家に不利益になる可能性があるので、出身集落、苗字は伏せる。ただし、和子が「八坂の澤田さん」といい、ここでも「八坂の」といったことに注目したい。滋賀県出身のカナダ在住者は八坂出身というイメージが和子の中にあるようだ。

27、町史によると与三郎の作った花と野菜は品評会で数多くの賞日本で華道だけでなく花作りも学んでいた経験を生かしたものだろう。

28、教育を受けるなどの目的でカナダから日本にやって来た間に戦争が始まり帰国できなくなった人のその後の人生については、鹿毛達雄『日系カナダ人の追放』（一九九八年、明石書店）を参照。

29、Terry Wtada, "Bukkyo Tozen -A History of Jodo Shinshu Buddhism in Canada 1905-1995"(1996, Toronto Buddhist Church)の二四六頁にはSataro Tanakaという補教士の名がある。元モントリオール仏教会駐在開教使高畑崇導氏（富山大学教授）に問い合わせたところ、「安居さん」であることが分かった。

30、西村開教使が大藪出身者の二世であることを同集落の角川真造氏から伺った。同開教使の生い立ちや人柄についてマニトバ仏教会会員安部美丸氏（故人）から多くの資料をいただいている。

31、村井忠政前掲書二七三頁。

32、工藤美代子『写真婚』（一九八三年、ドメス出版）一五九頁参照。

33、一九八一年三月二七日に盟約書調印。仲を取り持ったのは河村開教使だった。能登川町発行の記念冊子（一九八一年）による。

34、町史にはMeeksとMeekの両方の表記があるがMeeksが正しい。家族の生活歴については町史423頁などを参照。

35、名称は町史によったが、正しくはXerox Canada Electric Research centreか。なおmanagerという地位にあったようだが、日本流の役職のどの位置にあるのか不明なため本文のように訳した。

36、尾原宗乗著『了教寺本堂再建記―偉業への回顧』（一九七九年、了教寺）一六頁参照。なお了教寺の過去帳からも情報が得られるが割愛する。